会話に見られる「なんか」の機能拡張 —フェイス・ワークの観点から—

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>福原 裕一</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>国際文化研究</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>円</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>十番</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2009-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10097/00120309">http://hdl.handle.net/10097/00120309</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
会話に見られる「なんか」の機能拡張
—フェイス・ワークの観点から—

福原 裕一

要旨
若者が口ぐせのように使用する「なんか」が会話で果たす対人調節機能を明らかにするとともに、この「なんか」が従来の用法をいかにして意味的に拡張したのかを考察した。対人調節機能については、本研究が提唱する「フェイス・ワーク」理論によって考察した。フェイス・ワークとは、Goffman によって提唱された概念であるが、フェイスの定義には、Brown & Levinson (1987) を採用しつつ、聞き手のフェイスと同時に話す手のフェイスも保つ行為、または、話し手のフェイスのみを保持することや、相手のフェイスを潰す行為も広くフェイス・ワークと呼ぶこととする。従来の用法からどのような過程を経て拡張したかについては、Traugott の主張する「文法化」の概念を導入した。文法化の観点では、命題的→（テキスト的）→対人的という過程を経て、ある語句が言語表現へと拡張する。本研究ではいかに自分のフェイスと相手のフェイスを保持し、人間関係を円滑にするかといったフェイス・ワークが行なわれるものに対人的と考える。

キーワード：若者言葉、「なんか」、フェイス・ワーク、文法化

1. はじめに
本研究では、単なるつなぎ語、あるいは若者が口癖のように使用している「なんか」を取り上げる。中でも最近確認された用法で、「なんか」が発話権の確保や新しい話題を導入するのに使用される用法に着目し、この用法が従来の用法から、どのように意味機能的に拡張したのかを明らかにする。

また、「なんか」は従来、代名詞・副助詞として、発話の命題内容を構成する要素であったが、それがいわゆる若者特有の用法においては、主体の発想や発話態度を構成するものになっている。このことより、若者言葉の「なんか」は従来の代名詞や副助詞の「なんか」とは違った機能を持つ言葉として文法化したと考えられる。この流れは、Traugott
（1982）の主張する「文法化」の流れと関連があることから、「なんか」の用法に見られる意味機能拡張の普遍性についても同時に検証する。

2. 理論的枠組み

2.1 文法化

文法化とは、「内容語（語彙的単位を持ってきた要素で、動詞や名詞など）が機能語（語彙的内容が希薄で、助動詞や前置詞、助詞など）に通時的に変化すること」（菅井2003:173）を言う。秋元（2003）によれば、例えば、「have a letter to write」は「所有+目的を表す付加詞」という構造を持っていたが、「letter」が非指示的であるために“have”の所有の意味が弱まり（漂白され）、義務の語用論的推論が強まることで、次第にその義務の意味が「意味化」し、「have to write a letter」として“have to”が義務を表すモダリティ表現となった。ここでわれている語用論的推論とは、会話の含意がある文脈に頻繁に現れることによって習慣化、あるいは意味化するようになることであり、その過程で多義が生じ、やがて一方の意味が優勢になることであると秋元は言う。また、秋元は、Traugott (1982)の主張する一つの言語表現はその内容について語る指示的、命題的意味から、ディスコース全体の一貫性を生み出すテキストレベルを経て、発話内容への個人の判断や態度を示す感情表出、あるいは対人レベルへと文法化する過程に基づいて、語用標識の文法化も同様の過程をたどると主張している。本研究も秋元の主張する、語用標識（ディスコース・マークー）の文法化過程を参考にする。

2.2 フェイス・ワーク理論

実際のコミュニケーションにおいて、メッセージ自体はもちろん、メッセージの伝達に際して、話し手が聞き手との関係をどのように構築したいのかを考慮することも非常に重要である。お互い、相手にここがわかったといったイメージがあり、一般にそれを尊重し合うことによってスムーズな関係が生じる。このイメージをフェイスまたは面子と呼ぶ。フェイスに関するさまざまな方略をフェイス・ワークというが、とくに関き手のフェイスを尊重するストラテジーを研究するのがポラライトネス理論である。ただし、話し手は聞き手のフェイスに対してののみ配慮を行うだけではなく、同時に話し手も自分のフェイスを保持しながら会話を進めている。また、話し手のフェイスのみが保持される場面も多々ある。

（1） a「俺の財布盗ったのかまえだろ」
b「だから俺じゃないって、何度も言ってるじゃん」 (作例)

(1) bが本当に犯人ではない場合、bは自分のフェイスを守るために、相手である聞き手の意見を否定することによってフェイスを脅かすことになったとしても、自分の意見を開き手に理解させようとするだろう。このように、相手のフェイスを潰してても自分のフェイスを守ろうとする場合、ポライトネスの考え方では扱うことはできないが、本研究では相手のフェイスを潰す行為も、一種のフェイス・ワークであると考える。

また、本研究の提唱するフェイス・ワーク理論は、Brown and Levinson (1987) (以下、B&L) の Positive Face (PF) と Negative Face (NF) の概念を、拡大・再定義したものを採用する。B&L が主張する PF と NF は、例えば PF なら、「仲間にったり」「非難されたくない」などといった気持ちが同一に扱われているため、非常に分かりにくくなってしまうばかりではなく、矛盾が生じることさえある。例えば第2の例を見てみよう。

(2) 「田中君とか、女の子と付き合ったことないでしょ？」 (作例)

例(2)の「とか」は、若者言葉に特徴的な用法であり、先行する部分が一例であることを示し、断定を避ける機能を持つ（福原 2008）。すなわち、「あなたは異性にもてない」という相手のフェイスを傷つける発話行為（Face Threatening Act、FTA）に際して、「でもそれはあなただけではない」と FTA の度合いを緩和しているのである。言い換えれば、聞き手の PF「嫌われたくない」を侵害する代わりに、同じく PF である「仲間が欲しい」に配慮していると言える。また話し手自身も断定を避けることによって自らの PF「嫌われたくない」を保持しているとも言える。このように同じ PFであってもさまざまな側面を持つため、B&L の PF・NF の概念を以下のように再定義した。

**PF・NF の再定義**

PF の【肯定的特徴】：理解されたい、仲間になりたい（以下：【PF+]）

PF の【否定的特徴】：非難されたくない、嫌われたくない（以下：【PF−】）

NF の【肯定的特徴】：自由でいたい、独立してみたい（以下：【NF+]）

NF の【否定的特徴】：束縛されたくない、押し付けられたくない（以下：【NF−】）

このように、PF と NF を「肯定的特徴」と「否定的特徴」に分類することで、従来の PF・
NF の考え方では明らかにできない話し手と聞き手の間で行なわれるフェイス・ワークをより分かりやすく見ることができる。

3．先行研究
3.1 「なんか」の意味論的機能
会話において頻繁に使用される「なんか」がディスコース・マーカー（談話標識）の一つであることは、いくつかの先行研究によって明らかにされてきた（田窪・金水 1997、鈴木 2000、内田 2001、メイナー 2001 など）。
鈴木（2000）は「なんか」の機能を意味論的機能、語用論的機能、談話調整機能の三つに分け、「なんか」の本質的機能を意味論的機能とし、他の二つの機能が「なんか」の意味論的機能を持つ「不確定性・不特定性の標識」から拡張したものであると主張している。
本研究でも鈴木に近い、「なんか」の機能分類に関連する先行研究を概観しながら、「なんか」を意味論的機能と語用論的機能とそして談話調整機能に分類する。まず、意味論的機能から見ていくが、その際「なんか」を品詞ごとに分類することから始める。これは、同じ意味論的機能であっても、品詞ごとに分類することで、意味論的機能内における拡張について、ある仮説が成り立つためである。詳しくは次のセクションで触れる。

3.2 不定代名詞の「なんか」
鈴木は、「なんか」が「何か」の発音便形であることから、この「なんか」にもとの語「何か」が持つ「未知の物事」「不特定の物事」という意味が受け継がれていると指摘し、不定代名詞・副助詞として発話の命題内容を構成すると言う。筆者の収集した討論データにも、特定できない事物を表す語としての用例が見られる。

(3) F4W005a：F1T004 はさあ、やりたいことほとんどないの？
    F1T004：％％ないっていうか - - 見つからない。
    F4W005：今はね。
    F1T004：あたしは - - まあ甘えんですけどそれでも今のままでいると思っています。
    F4W005：あのさ - - 具体的じゃないくていいしさ - -
    F1T004：はい。
    F4W005：何バカじゃないの？って思われてもいいから、なんかないの？
    F1T004：国家資格を取りたいなって思っています。 （2005年3月21日放送）
（3）は、将来についての討論の一部で、将来やってみたいことや、なりたいものがはっきりしていない F1T004 に対して、F4W005 が 7 行目で「なんかのないの?」と尋ねている。ここに現れた「なんか」は英語の something に相当する不定代名詞である。

3.3 副助詞・とりたて詞の「なんか」

鈴木や内田は、先行する名詞句に「一例であることを示す」「対比させて強調する」または「価値の低いものであることを示す」意味を添加する「なんか」を、副助詞として扱っているが、寺村（1991）や沼田（1986）はこれを「とりたて詞」と呼んでいる。とりたて詞の「なんか」は、（i）例示・同類を表し、（ii）叙述の弱め/和らげを表し、（iii）話し手の評価を暗示する用法を持つ。これは内田（2001）の指摘する副助詞「なんか」の機能とほぼ同じである。しかし、鈴木や内田の考察に比べ、沼田、寺村のとりたて詞「なんか」の考察は、より多くの例文を提示し、とりたて部分と「なんか」の意味との関係（これについては後に詳しく述べる）を的確に記述していることから、本研究もこれにならって、これ以降は副助詞をとりたて詞と呼ぶことにする。

沼田（1986）は、とりたて詞「なんか」が文意を和らげることを指摘している。また、寺村（1991）は、「X なんか P ない」で示される構造には、「話者の頭のなかに、なにか非常に高い存在があって、それとの関連で、X のように低いものが P することが思いもよらないことだ」という意味があり、それが「X の属する類のもののレベルが P にはかけはなれて低い」という意味につながり、その「低さ」が「自分、自分とつながりのあるものであれば、謙遜になり、相手あるいは第三者であれば髪り」になると主張している。以下に例をあげ、それぞれについて見てみよう。

（4）《例》山下君と鈴木さんなんかと一緒に行こうと思ってるんだ。 （作例）
（5）これなど（なんか）よくお似合いになるかと存じますが……… （沼田 1986）
（6） IMSUI まずね。ぼくなんか、とうに卒業してしまった。 （沼田 1986）
（7） おまえなんか相手にしていたら、牛川の名がなくせ。 （沼田 1986）

（4）は、（i）例示・同類を示す用法である。この用法について、仁田（1982）は、「いくつかの列挙した事柄を総括する、若しくは、総括することによって他にも同類の事柄が存することを暗示する」と言っている。（5）は（ii）叙述の弱め/和らげを表す用法である。

（4）の用法との違いについて、山田（2003）は、明示された事柄以外の事柄の存在が想
不定しにくいと指摘している。(5) は、明示された要素以外に、他者が存在するようなニュアンスを持たせることで、示唆を和らげている。つまり、特に具体的な情報はないが、他にも可能性があり、それは一例に過ぎないことを示すことによって、断定を避けているのである。 (6) (7) は、(iii) 話し手の評価を暗示する用法である。 (6) は、自分あるいは自分のつながりのある事柄について扱い、自分を価値の低いものとして、相手に対して謙遜を示し、(7) は、相手や第三者とつながりのある事柄について扱い、相手を価値の低いものとして侮っている。いずれにせよ、「例示」あるいは「類例が存在することの示唆」という意味はかなり薄くなっていることは間違いない。

不定代名詞「なんか」が持つ「不特定な指定」や「他の可能性の示唆」といった意味がとりたて詞「なんか」へも受け継がれているという、多くの先行研究の主張は異論はないが、Traugott の主張する文法化の過程におけるという「意味の漂白」の観点から考察すれば、とりたて詞の用法は、(i) 指示的、命題的意味→ (ii) テキスト的、感情表出的意味→ (iii) 対人的意味へと段階的に拡張したものであると見ることができる。

図 1. 「不定代名詞」「なんか」と「とりたて詞」「なんか」の関係

このように、不定代名詞「なんか」の持つ本質的な意味論的機能の一つである「他の可能性の示唆」を、とりたて詞「なんか」が引き継いでいることは確かである。しかし、とりたて詞のそれぞれの用法ごとに見ると、とりたてる部分によっては「なんか」の持つ本質的な「他の可能性の示唆」という意味が弱まっていることがわかる。
3.4 副詞の「なんか」

「なんか」には、「なんかつう」「なんか寂しそう」などのように、漠然と感じられるが特定できないものがあることを表す用法がある。副詞の「なんか」がこれに相当する。これには不定代名詞「なんか」の持つ、本質的な意味論的機能である「不特定な指示」から拡張したものであると考えられる。このことから、不定代名詞「なんか」の意味論的機能のうち、「他の可能性の示唆」を拡張したもののがとりたて詞であり、「不特定な指示」を拡張したもののが副詞の「なんか」であると考えることができる。

これをさらに文法化の観点からみると、語彙的・命題的な不定代名詞「なんか」がテキストレベルへと文法化したものがあり、とりたて詞ならびに副詞の「なんか」であると言えよう。次節で詳しく検討する「なんか」の語用論的機能は、さらに文法化が進み対人的（interpersonal）レベルに達したものと思われる。

3.5 「なんか」の語用論的機能

3.5.1 鈴木（2000）「なんか」の語用論的機能

鈴木は、「なんか」が発話内容に対する発話者の態度をメタメッセージとして聞き手に伝えるものを「なんか」の「語用論的機能」と捉え、Goffman（1981）によって提唱された、animate、author、principal から成る product format および figure の諸概念を援用した分析を行い、「なんか」の語用論的機能を（ⅰ）伝聞表現に呼応するもの、（ⅱ）婉曲表現に呼応するもの、（ⅲ）過去表現と共起するもの、（ⅳ）否定的な意見を暗示するものの、（ⅴ）否定的な内容の意見を暗示するものの 5 つに分類した。（ⅰ）（ⅱ）（ⅲ）は、主に文頭において使用され、（ⅳ）（ⅴ）は文末において使用されると鈴木は指摘している。今回の考察では、文頭で使用されるディスコース・マークとして「なんか」を考察するため、また、若者言葉としての「なんか」は主に文頭において使用されることから、（ⅰ）（ⅱ）（ⅲ）を参考にし、文末での機能は扱わないものとする。（ⅴ）は「なんか」に後続する部分を、あたかも伝聞であるように、第三者の立場から伝える機能がある。

（11）話題：C と同じ学部に所属する D の友人

291D：とかなんか、僕の友人のね、

292C：  そう  うん

293D：人科の人とか話し聞いてると、

294  ：なんか最近、学校とかかもしれない、
295 : ほとんど行ってないらいけんだけ。
296 : 出なくていい、なんか授業が少ないって聞いたんだけど。
297 : なんか週、なんかもう、今もう週休４日だとかいうようなやつ。

（鈴木 2000:68）

鈴木は product format の変化は、話し手の発話内容に対する態度の変化であると指摘し、
「なんか」が product format の変化を予告する標識であるとして、後に続く発話内容に対
する話し手の態度を開き手に予測させていると主張している。例（11）では、これに先行
する発話では C が所属する学部の教官に対する二人の感想が述べられており、その時点で
の発話者の product format は、author = principal であった。しかし、（11）
における話し手 D の product format は、author = principal ≠ principal に変化している。
このように principal が author・principal と一致していないことから、D がその発話内容
に対して、やや離れた立場を取っていることが予測されると指摘する。そして具体的に話
話し手がどのような態度を発話内容に対して抱いているのかは、291、294、296、297 の「な
なんか」が、293「話聞いていると」、295「らしいんだけど」、296「て聞いてたんだけど」
および 297「とかいう」といった発話表現にそれぞれ呼応していることから、この話し手
は、相手に自分の発話内容に対するあいまいさ、自信のなさ、責任転嫁などのメタメッセージ
を伝えていると言う。

しかし、ここで言われるような伝聞機能とは、「なんか」自体が担うものではなく「な
なんか」が呼応する「らしい」「ていうか」などによる機能であることから、これらは「なん
か」の機能とは言えない。また、「なんか」を、product format の変化を予告する標識と
主張していてながら、この「なんか」自体に伝聞の機能が確認されるような書き方は誤解を
与えている。同様に（ii）（iii）においても、誤解を与える記述が散見する。

以上、鈴木による「なんか」の語用的機能について見てきたが、これらは「なんか」によ
る機能ではなく、「なんか」が呼応する表現の持つ機能と言うべきでない。つまり「なんか」
は、product format の変化を予告する標識にすぎず、このでの product format の変化の予告と
は、語用的機能「なんか」を使用することで、話し手が相手に自分の発話内容に対して、な
なんらかの態度を含んでいることを示唆させるものでしかない。しかるに、鈴木の提唱する「な
なんか」の語用的機能は、「なんか」自体の機能を説明する物ではない。

このように、それ自体が命題内容を持たない「なんか」は、フィラー（filler）の 1 つとして
扱うことで、「なんか」の機能について説明できる。フィラーとしての「なんか」については、
5 節にて詳しく述べる。

3.6 「なんか」の談話調整機能

鈴木は、田窪・金水（1997）が指摘する、「言いたいことが頭に浮かんでいるのにもかかわらず適切な言葉がすぐにでてこない時などにみられるつなぎ言葉（filler）としての「なんか」が、談話調整機能にあたると主張している。また、鈴木は、「なんか」は、発話権を獲得したり、保持する場面でも使用されるという。

（12）話題：就職先選び

084G：なんかやっぱ、お化粧品メーカって、楽しそうだよね。
085 ：普通のとこより。
086H：うーん。
088H：なんか自分の興味が、かなり
089G：なんか、そー
090 ：なんかさ、いっこ下前バイトで一绪だった子大阪の薬学で、
091H：ヘー
092G：その子も就職したら化粧品会社とかで、開発したいとかってさー。
093H：うーん

（鈴木 2000:74）

（12）のように、発話権を獲得する「なんか」は、先行する話し手の発話と重なる場合が多い。相手の発話に重ねるように、この「なんか」を発話しておくことで、発話権を確保し、次の言葉を準備する余裕を作り出していると、鈴木は指摘している。このような「なんか」の使用例は、最近確認された用法であり、若者に特有の用法であると言える。最近確認された若者に特有の用法を扱っている点では、鈴木（2000）は評価できる。しかし鈴木は、フィラーと一言で言ってもいろいろな機能があるのに、発話権の獲得と保持についてしか触れていない点が問題であろう。

3.7 フィラー（filler）の「なんか」

3.7.1 Maynard（1989）のフィラー

Maynard（1989）では、会話における様々な現象を取り上げており、「なんか」をフィラーとして扱っている。Maynard はフィラーを、命題的意味を持たない発話として捉え、言語表出に関わるフィラーと、対人関係のために用いられるフィラーの 2 種類に分類して
いる。それぞれの機能については、(i) 沈黙を回避する、(ii) 話の継続を示唆する、(iii) 踏聴や不確定さを表明する、(iv) 発話を和らげる、などの働きがあることを指摘している。
(i) (ii) は、言語表現に関わるものであり、談話全体の構成要素となるため、テキスト的なものと、(iii) (iv) は、いわゆる対人調整的なものであると Maynard は指摘している。本研究もこれを参考にして、文頭で使用される「なんか」をフィラーとして扱い、フェイス・ワークの観点から、「なんか」の分類を試みる。

3.8 先行研究の問題点

鈴木の主張する、「意味論的機能→語用論的機能→談話調整機能」という拡張過程や、最近確認された若者の特有の「発話機獲得」や「新しい話題の導入」について扱っている点は評価できるものの、分類された「なんか」の機能が、「なんか」独自のものではなく呼応する「ていうか」「みたい」「らしい」などの機能である点、意味論的機能と語用論的機能の分類の基準が明確でない点には不満がある。

Maynard (1989) は、(i) (ii) のフィラー機能が言語表現に関わることから、テキスト的なものであると指摘するが、フェイス・ワークの観点から考察すると、これらは対人調整機能と深く関わっていることがわかる。この点については以下で詳しく触れる。

本研究では、話し手と聞き手の間でのフェイス・ワークから意味論的機能と語用論的機能及び談話調整機能の関連性を明らかにする。フェイス・ワークの概念を用いることにより、「なんか」の「意味論的機能→語用論的機能→談話調整機能」という拡張が自然に説明できるモデルを提供できる。

4. フェイス・ワークによる記述

本研究の目的はフェイス・ワークの概念を導入することで、話し手と聞き手、双方のフェイスがどのように保持されているのかを明らかにすることにある。そこで、鈴木 (2000) で語用論的機能として扱われていた「なんか」をフィラーとして扱い、フィラーに見られるフェイス・ワークをもとに、「なんか」を以下のように 3 つに分類した。なお、(a) には、フィラーの機能を、(b) にはそこで行われるフェイス・ワークについて記している。

(i) フィラー (1)：「今、適切な言葉を探している」ことを示す

a. とりあえず「なんか」と発話することで、今ある自分の発話権を保持する。

b. 聞き手の注意を自分に喚起すると同時に、聞き手に発話権を奪われない
のようにするための、話し手の【PF+】保持機能。
例：「あなたは自分はなんとか、なんとか。その、なんとか。それと言われた時は･･･」

（ii）フィラー（２）：新たに発話権を獲得することの前置き

a. 直前の話題との関連性が保たれている場合は、発話権獲得であるが、直
前の話題との関連性がない場合は、新しい話題の導入となる。

b. これから発話権を獲得したり、新しい話題を展開することを聞き手へ喚
起するための、話し手の【PF+】保持機能となり、聞き手の【NF－】を
侵害することもある。話し手が沈黙を回避する（聞き手に助け舟を出す）
際に使用することもある。この場合は、聞き手の【PF+】保持となる。
例：（直前の発話と重なる形で「なんか」を発話）「なんかあなたし、そのまま付き合
ったこととか何回あったんだけど」（発話権獲得）
例：a（bの沈黙の後）「なんか、俺が思うに、bはランキングが自分にとって本
当に必要なものを選ぶのを邪魔してるってことじゃないの？」
b「あ、はい。そういうことです」（聞き手に助け舟を出す）

（iii）フィラー（３）：相手の発話を引用し、それに対する自分の評価を示す

a. 展開されている話題や聞き手、または第三者の発話（発話をそのままの
形で引用することに限らず、考えて意見など）を引用し、それに対する
話し手の評価や態度を示す。

b. 聞き手や第三者に関わるため、前置きとして「なんか」を発話すること
で形式上引用する内容が「不確か」であることをメタ言語表示する。事
前に「不確かさ」を示すことで発話責任を回避するための、話し手の【PF
－】保持機能を持つと同時に、評価の根拠が不確かである以上、結果と
して話し手の評価が正しくはない可能性を示唆するための、聞き手の
【PF+】保持機能を持つ。
例：「M1K001 君はさーさっきなんて学歴とりゃいいと思ってるやつは？･･･だめ
だみたいだと言ってたけど･･･」
4.1 フィラー（1）の「なんか」

では、フィラー（1）に見られるフェイス・ワークを見てみよう。このタイプの「なんか」は、同一発話における発話権を保持するために使用される。これは一人の話し手の比較的長い発話に見られ、さらに発話を継続する意思を示するために「なんか」を使用するのである。話し手は自分の発話権を主張したり、あるいは聞き手に注意を喚起するものであるため、話し手指向のフェイス・ワークが見て取れる。以下で実際の会話データを使用し、詳しく見ていく。

(13) F1K002：あたし、あの、周りとかで〈Q<&ありがと（ありがとう）Q〉のことを、〈Q ありちゅありちゅ Q〉とか〈&言うねんやん（言うんです）ね。&ていうのも（というのも）流行言葉（&なんか（じゃないですか）。そういう会話があってこそ仲くなれてコミュニケーションしていく（&もんと（ものだ）&と思うねんやんか（思っているじゃないですか）？吸い息そこで踏めなかったら私、その次に(&行けないねんや（行くことができないですね）、いきなり、吸い息）＊＊＊なんかさっさーなんか、流行言葉の会話は(&好きじゃないな - い - 嫌って言った（&なんか（じゃないですか）。あたしは%自分はな - なんか、なんか、その、なんか、それと言われた時は流行言葉を使った(&会話ってのは（（というのは）、小物の魚みたいな扱い（&なんかあって（のかなって）%私は段階踏むまでに、その、乗りの良い会話ってあっていいと(&思うねんやんか（思っているんですね）

(2004年7月16日放送)

(13)は、FTK002が若者言葉について思うことを語っている場面である。このように一人の話し手による比較的長い発話では、さらに発話権を継続する意思を示すために「なんか」が使用されることがある。例文9行目の「なんか、なんか、その、なんか」がこれにあたり、適切な言葉を捜すために発話されたもので、「今は、適切な言葉を探している」ことを表し、聞き手にまだ自分に発話の権利があることを示すものである。フェイス・ワークは、話し手の「理解されたい」という【PF+】保持である。このように、フィラー（1）は、同一発話権内での、発話権の継続や話し手が適切な言葉を探すために使用されることから、話し手の【PF+】保持のためのフィラーであるといえる。
4.2 フィラー（2）の「なんか」

次に、フィラー（2）の「なんか」について見てみよう。このタイプは、新たに発話権を獲得するために「なんか」が現れるものである。それでは、実際の会話データを例に詳しく見ていく。

（14）M1N001：俺は、その言葉ってのをストレートに言って欲しいってのがあって、提案してるんだけど、そのストレートに言おうってかそこで、自分の意思を相手と伝えようって気持ちと、相手のこと知りたいって気持ちが大事なんじゃないかって。

F1T003：なんかね、言葉は葉だと思うの。[吸い息] その人の一言によって気持ちわかるし、また、相手の受け方が[吸い息] だから怖いの。なんか、相手にも、自分の一言で傷付いたりしたら、怖いなって思うの。私、だから気持ちを言葉で入れて言うのは、あの、相手に通じるのはすごい大変なことだと思うの。

M1N001：うん。 （2004年7月16日放送）

（14）は、「なんか」によって、新たに発話権が獲得される例である。F1T003 は、「なんか」を使用して、自分の発話権を主張している。発話権獲得に見られる「なんか」の特徴は、現在発話権を持っている話し手の発話に重ねるような形で「なんか」が発話されることがある。一般にこのような話し手の【PF+】保持は、聞き手の【NF-】を侵害する行為であるが、相手の発話に重ねない場合は、聞き手の【NF-】侵害とはならない。また、沈黙を回避する意図で、聞き手に対して話し手が助け舟を出す場合には、聞き手の【PF+】保持につながる。

4.3 フィラー（3）の「なんか」

最後に、フィラー（3）で行われるフェイス・ワークを見てみよう。このタイプは、相手の発話を引用し、それに対する自分の評価を示すものである。それでは、詳しく見てみよう。

（15）M1T003：高校にまあとってわけだけど、% [吸い息] また、文章書くのが好きだからさ。まあ、最近は作家もいいかなーちょっと思い始めてみだけど[吸い息]

M1K001：君はさー（飲み込み）きっなんか学歴とりじゃないと思ってるやつは？

M1K001：うん。
M1T003: だめだみたいなことってたけど、それは〈＋M1K001 君が安全策取れ＋〉ないからそんなこと言ってるんじゃないの？〈－ひがんで－〉。

(2004年7月9日放送)

（15）は、将来の夢についての話し合っている。M1K001は、自分の夢を実現させるためには、その夢に向かって現在努力することが大切であり、夢がかなわなかった時のための保険として大学へ進学することをよくないと述べている。この意見に対して、M1T003は全く異なる考えを持っており、「なんか」を使用してM1T003へ否定的な意見を述べている。（15）の7行目「なんか」は、相手の言葉を、そのままではないかもしれないが、引用している場面である。相手の言葉や、言葉に限らず考えなどを引用する場合、引用の部分は、相手の発話から話し手が推論したものであり、もしかしたら間違っているかもしれない。間違っていた場合は、「そんなこと言ってないよ」と反論されたり、聞き手の抱いている話し手の評価を落としてしまう。そこで、話し手は形式上はあるが、引用する内容が「不確かな」であることをメタ言語表示し、話し手の発話内容への責任を回避している。つまり話し手の【PF－】（非難されたくない、嫌われたくない）を保持しているのである。

さらにこの例では、相手の発言を否定的な立場で引用している。このような場合は、相手のフェイスにも配慮する必要がある。「私はあなたに反論するが、これは私の誤解に基づくものかもしれない。あなたの意見が間違ってない可能性も十分ある」という含意を、引用する内容が「不確かな」であることをメタ言語表示によって示しているのである。したがって、ここで「なんか」は聞き手の【PF+】（理解されたい）も保持していると考えることができる。

5. 「なんか」の意味拡張

鈴木（2000）は、「なんか」の意味拡張について、意味論的機能から語用論的機能へ、そして最終的に話し調節機能への拡張を主張していた。しかし、この拡張の過程は、本稿での考察とは多少異なるものになった。本研究は、鈴木が「語用論的機能」と分類した「なんか」が、命題的意味を持たないことから、フィラーとして抜き、さらにフェイス・ワークを導入することで、「なんか」の意味拡張の過程は、図2のような過程をたどるという結論に至った。
まず、従来の用法として位置付けた、不定代名詞「なんか」が、その意味機能である「不特定な指示」や「他の可能性の示唆」の意味を弱めつつ、それぞれ副詞の「なんか」およびとりたて詞「なんか」へと用法を拡張させるとともに、テキストレベルへと文法化した。
さらに不定代名詞「なんか」ならびに副詞「なんか」の意味の希薄さ、指示の不定性からフィラーの用法が生じ、対人的レベルへと文法化したと考えられる。

フィラー（1）ならびにフィラー（2）の「なんか」では、「不特定な指示」や「他の可能性の示唆」の意味が完全に消失し、発話語の保持や獲得に関する機能に特化したといえる。発話語の保持や獲得は、話し手のフェイス保持に関わる行為であるため、対人的なものである。そして、フィラー（3）「なんか」であるが、相手の発話を引用し、それに対する自分の評価を示すことから、こちらも対人であると言える。この意味機能の拡張過程は、Traugott の主張と一致している。

6. まとめ

以上のようにフェイス・ワークを導入することによって、意味論的機能と語用論的機能の関連性、および用法の拡張をより分かりやすく説明することができる。この拡張の過程は、Traugott（1982）の主張する文法化（grammaticalization）の過程である、言語表現の意味は命題から、テキストレベルへ、そして対人レベルまで拡張されるという仮説を支持するものと言える。

「注」

1 全国の10代が参加者となり、討論するテレビ番組「真剣10代しゃべり場」（NHK教育放送）の2004年6月から2005年7月にかけて放映されたもの、約280分の中から、「 ihnawa」とその変異体「てんか」、「つか（つうか）」、「ちゅ（ちゅか）」が文脈で用いられたものを、ナロック（2005）に従い書き起こしたものを使用した。

2 話し手は話し手IDで表示。話し手IDは、半角英数6桁とする。その内容は、性（M/F）、年代（1桁）、方言（1桁）、通し番号（3桁）：例（黒田徹子さん）F6T001方言は、T＝東京、標準語、E＝東北・東日本、H＝北海道、K＝関西、N＝日本海、W＝西日本その他の語を表す。発話情報（実際の発話はすべて半角）。「」：終止、ピッチが下がり発話が終止する。「、「」：連続、ピッチが少しばかり下がる、あるいは平板で発話がその後続。「？」：働きかけ、ピッチが上がる、疑問など。「」」：途切れたボイス。[[・]]：発話の重なりを表す。複数行で重なりが続くと、2重、3重話弧も使う。「%」：ボーズ。長いものは「%」で表す（吸い息）：吸い息をする。「飲み込み」：飲み込み。「」：大きな声で話した言葉を囲む。「」：小さな声で話した言葉を囲む。「[]」：唱読の項目を囲む。「[]」：聞き取れない音節を表す。分節は「**」で表示。「Q Q」：引用された発話部分を囲む。発音合計、方言名は「&」以下にその標準形を記す。

3 product formatとは、話し手（speaker）の役割を、音声を発するanimator、表現する語彙選択して文の形に組み立てるauthor、伝達される信条や感情を有するprincipalに分解し、さらにトーキー中の世界の登場人物としての話し手figureを導入したものです。通常は同一人物がこれからの役割を演じるが、そうでない場合もある。鈴木（2000）は、このprincipalを「話し手の発話内容に対する距離、あるいは立場を表現する」役割として独自に解釈し、話し手がこの役割を演じていない場合を、発話内容に対して話し手が距離を取っていると解釈することで、「なんか」における伝聞・
「参考文献」
秋元実治 (2003) 『文法化とイディオム化』ひつじ書房
寺村秀夫 (1991) 『日本語のシナクスと意味』Ⅲくろしお出版
ナロック・ハイコ (2005) 「日本語声言葉データの表現マニュアル」Ms.東北大学
仁田義雄 (1982) 「助詞類各説」『日本語教育辞典』大修館書店
沼田善子 (1986) 「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
福原裕一 (2008) 「若者言葉のフェイス・ワークーフェイス保持に関わるディスコース・マークの考察一」(博士論文)
メイナード、泉子・K. (2001) 『談話分析の可能性』くろしお出版
山田敏弘 (2003) 「ナドとナンカとナンテ話し手の評価を表すとりたて助詞一」宮島達夫・仁田義雄編
『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版